

学生取材レポート

第 21 回京都教育懇話会

「日本の未来と人づくり—志を培う教育を考える」

8月7日（火）、立命館朱雀キャンパスにて、第21回京都教育懇話会を開催した。

今回は「日本の未来と人づくり—志を培う教育を考える」と題し、今夏行われるオリンピックとも絡め、幼少期から世界を目指すアスリートの高い志はどうやって培ってきたのか。日本の次世代教育で高い志をいかに育てるか、人づくりではどうあるべきかを考え、討議する場所となった。また、当日は、市内で、京都市等による京の七夕も開催しており、会場には笹を用意し、講師や来場者が自身の志や次世代への思いを記し、短冊を飾った。

第一部では、京都市長の門川大作氏が基調講演を行った。志を培う教育は教育の原点と語る門川氏は、「志」の字にそれが表れていると言う。「志は、進みゆく足の形が変化したもの。その中に心があるということは、進みゆく中に思いがあるということ。他の動物にはない、『志』は、人間だけが持つ、人間皆が持つ力だ」と力強く説いた。

第二部では、パネリストとして門川市長に加え、京都市教育委員・文科省中央教育審議会委員である奥野史子氏、京都サンガF.C.ゼネラルマネージャーである祖母井秀隆氏。また、コーディネーターとして京都市洛陽工業高等学校校長である恩田徹氏を迎え、パネル討議が行われた。バルセロナオリンピックでシンクロ銅メダルを獲得した奥野氏は、辛い事しかなかったオリンピックまでの道から、「人は厳しく育てるべき」と明言した。「辛い事しかなかった努力で乗り越えたメダル獲得への壁は、その後努力さえすればなんとかなるのではという自信に変わった。しかし、急に大きな壁を乗り越えられたわけではない。小さな壁を乗り越えてきてこそ。次世代育成でも同じ。躓く前に教えてあげるのではなく、躓いて自分で気付く方がいい。小さい頃から子供が自分自身で少しずつ壁を乗り越えていくべき」と語った。また、優しいだけでは人は育たない。一概に厳しくするのはではなく、また一概に褒めるだけでもなく、自分で設定した目標を達成できたかどうかで子供を褒めていくのが大切だ、と提言した。

続いて祖母井氏は、長くドイツにいた経験から「住み良い日本」に警鐘を鳴らす。「日本に帰って、逆カルチャーショックを受けた。サービスが良い事は日本の素晴らしい文化だが、『転ばぬ先の杖』非常に多い。自分が気付く前に注意をしてくれるので、自分で注意をせず、また判断もしないままになっている」子供自身が気付き、考えることを重視し、今の日本ではそれが欠落しつつあると訴えた。

門川氏は「甘さと優しさ、冷たさと厳しさが混同してしまっている」と発言した。生徒に厳しくするには、先生の覚悟と気力が必要とされる」と説いた。

コーディネーターである恩田氏は、三人の意見を踏まえ、「スポーツ、勉強共に結果は確かに大事。しかし、それを通して人としてどう成長するか。また人として成長することをどうサポートをしていくかが今後指導者の課題。過保護すぎる面も少なからずある。子供たちのチャレンジを支えることが必要だ」と語った。

第三部では来場者の質問から話を展開する質疑応答を行った。高校生から社会人まで様々な目線から質問が寄せられ、参加者の気づきの場となり意識が高まった。

【取材：絹輪芽以（追手門学院大学3年）】